文部科学省認可通信教育

たんぽぽ

vol. 67

平成２１年７月発行
発行者　放送大学
　　富山学習センター
責任者　所長 渡邉 裕司

バッハの想い出
－新任のご挨拶にかえて－

客員教授　海老原　直邦

この４月から富山学習センターの客員教授として赴任しましたが、このセンターとは、心理学関連の面接授業担当講師として、随分長い間お付き合いしてきました。心理学実験の授業では、実験の実習を行うため，さまざまな年齢層や職業の方々と身近に触れあう機会が得られて、私自身としても楽しみな時間になっています。

私は元芸能人の県知事で有名な九州の宮崎県宮崎市で生まれました。あれは小学校の低学年の頃だったでしょうか、私がちょうど眠りに就く時間に、父親が隣室でよくピアノを弾いていたのをボンヤリと覚えています。父は大学教員で音楽を専門にしていましたので、授業用の教材の研究でもしていたのかもしれません。特にバッハのインヴェンションという曲が印象に残っており、その音の響きは音楽のいわば原体験として、私にとっては重要な意味をもち続けているような気がします。

現在「バッハ・アンサンブル富山」という合唱サークルに所属して、週１回の練習を楽しんでおり、バッハを唱うことが単なる喜び以上のものになりつつある私ですが、ひよっとして小学生時代の原体験が、還暦も過ぎたこの年齢になって、バッハの音楽に向かわせる無意識の原動力になっているのかもしれません。心理学の理論の中には、幼少期の体験が、人生の後の時期にまで大きな影響を及ぼすことを強調するものが少なくありませんが、私の行動も実はその実証例なのかもしれません。

神経科学的な研究によれば、音楽を聴くと、脳が一気に広い範囲にわたって活性化し（つまり神経インパルスが脳内の情動領野や言語領野を駆け巡り）、その結果として、音楽特有の「快」がもたらされるようです。しかし、音楽は「感情の言語」ともいわれるように、感情を直接的に表現したり、情動を他者へ伝達したりする働きによって、単なる娯楽としてだけではなく、言語とは別のチャンネルを通して、人間関係や人間社会の安定や発展のための重要な役割を果たしているのではないでしょうか。

音楽によって心身の不調や障害を少しでも改善しようとする音楽療法について、私自身は実験心理学的な手法を用いて、この１０数年間、研究を続けてきましたが、音楽が心身に及ぼす効果については、まだまだ分からないことだらけです。本当に社会に役立つような音楽の用い方や、人間存在にとって音楽がもつ意味について、これからも探究し続けていきたいと願っています。